

京鹿子

平成二十九年七月一日発行
通巻二二二号 毎月一冊 二頁 二角



7月号

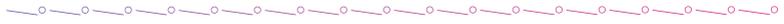
夏季吟旅特集号

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その二十一

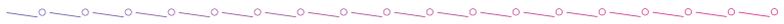
美山三句

天の秀へ鉾杉夏を突き抜ける
懐に美山を抱く余花残花
大でまり柱時計の里時間
絡繰りの信号疎し街薄暑
手翳しの薄暑の湖へ白帆かな





嵐 峡 の 緑 へ 走 る 一 輛 車
不 審 蚊 の 張 り 手 を か わ す 奇 手 緩 手
鉄 線 花 町 会 長 の 任 解 か る
粗 方 の 罪 は 逃 げ 足 尺 取 虫
雷 一 閃 己 が 身 の 爪 切 り と ば す
大 雑 把 は 括 弧 に く く る 青 み ど ろ
大 さ じ 一 杯 新 緑 の カ フ ェ テ ラ ス
は た め い て 土 用 鰻 の う の 字 伸 ぶ



近詠

鈴鹿 仁

烏城

絵図のごと烏城称へし花菖蒲

能舞台けふの舞手は黒揚羽

桃太郎いづこに御お在はす沖がすみ

閑谷の仁の訓への緑さす

天領の街いかめしきつばめ反る



近詠

和田照海

平家蛭

裔の血を向後は吸はず平家蛭

裔の里魚みな痩せて蛭の水

通盛の小流れにして蝌蚪育つ

局墓へ袈裟がけ径や寺椿

峰里や無尽の風の鯉のぼり



英華採集

日永かな遊びを知らぬ電波時計

京 都 加 舎 廣 子

今や家庭の中で大半を占めているであろう電波時計。何が便利と言えば正確無比の上でもないことに加えて人の手で調整をしなくて済むのが一番。時間に追われている者には時を正しく伝える点、その役割を十分に担っているが、「遊びを知らぬ」の措辞には大いに合点した。遊び感覚は、作句の上にも重要であると同時に日常生活にも取り入れていきたいものだ。

字余りに生きてたんぼ踏んでゐる

鎌 倉 平 佐 和 子

ネット社会と言われる今の世の中では、情報が氾濫し我々はその情報に踊らされている、と言える。日々の生活に満足している者、不満を抱く者に分かれる中で溢れている情報が、字余りの社会である。情報の善し悪しを取捨選択出来るようにならなければ、たんぼぼを踏んでいることに気付くことはないだろう。

花狼煙鬨の声あげ大地より

守 口 藤 浴 博 子

桜が正に満開を迎えようとしている時、桜の自己主張がはじまる。「今が私の一番美しい時よ」と、桜が訴えかけているかのよう。「花狼煙」と言う複合季語で喻えた独自の表現が斬新である。それは、恰も大地から湧き上った鬨の声である。

松本 鷹根

余花の里

山藤の神樹縫りに空浄む

風馴らす池は浅葱に躑躅燃ゆ

彩りを庭に尽くして余花の里

店構へ宿場名残りや柏餅

朱の御輿新樹燻りの風に発つ



近 詠

桜

流れゆく刻の嵩増す花の雨

ひとひらに涙とどめし花筏

一本桜夜明けの夢の青白し

七本の万朶の桜ひとりの午後

花吹雪隣の席へ招き入る

塩貝 朱千



神麓集

白鉄線 藤岡紫水

初夏 丸井巴水

けだるさの雨となりたる牡丹苑
親しさに甘えて所望豆の飯
街薄暑水の匂ひを流す花舗
一瀑をかけて万緑引き緊まる
白鉄線白に徹する身だしなみ

石跳ばす毎に骨鳴る初夏の湖
白髪の妻ゐて温き豆の飯
慾ひとつ残せし余生おそざくら
蝌蚪の尾のゆらめき猫が手を濡らす
泣く児には初夏の半島唾へさす

蝉時雨 沼田巴字

花洛の忌 植村蘇星

誰もゐない島の岬や盆の月
蝉の穴隠れ家としてふさはしき
昼寝覚映りしものを夢として
俊寛のつひえし島や蝉の殻
蝉時雨人のくるしみよそにして

吾にホクありて今日あり花洛の忌
九十九折り越さば古里花菜畑
やすらぎを覚ゆ古里花菜畑
一夜明け俺の連発入学生
一夜明け母校と呼びし辛業子



神麓集

曾孫入学

北川孝子

退け時

高木晶子

顔中を口にして歌入学す
聞き役のほほ笑んでゐる花菜風
来し方の起点にいつもさくらかな
省みる日日茫茫とさくら待つ
想ひ今あの世この世へ花うつろふ

仏心の耳となりたる紅椿
立ち止まる坂の途中の花三分
洛中の真闇とならずほたるいか
集ふさま散るさますべて花の酔
退け時の彩持ち帰る夕桜

埋み

直江裕子

プーシキンのさくら

伊藤希眸

菜の花の埋みに母の毀れゆく
囀りを聞き分けてゐるパンの耳
芹の青根つこの先までがふるさと
少し古い桜こぼさぬやうに生く
お笑ひの壺にこぶしの花盛り

天上の雲を踏むべし野芹摘む
喜怒哀樂かげるふに溶け杭一本
白鳥の帯曳くやうに北を指す
春雪に僅かの撓み庭木の枝
血管の青筋プーシキンのさくら咲く



神麓集

鎮静剤 木戸渥子

霞む夜のガス灯パリの旅はるかのどけしや砂の好きな子嫌ひな犬馬鈴薯が芽を出すなんて猪古才な花冷えのおなかを押してマヨネーズ春疾風仁丹わたしの鎮静剤

高瀬川 奥田筆子

革命も炭も運べり高瀬川花ミモザ不得要領のままうなづく静電気はげしき三月試着室束縛は藁で束ねしわらびかなおんなふと花びらになる自由席

春の小川 井上菜摘子

いつよりの落着かぬ耳座禅草座禅草いのちのどこかは暗がり真つ向に比良の残雪言ひ止しぬ藪椿落つわたくしであるためにまんなかを春の小川や友情とは

補助車輪 村田あを衣

花しきび古文書を守る隠れ里手のひらの折鶴翔たす花月夜嫌はれず好かれずひとり春炬達端役とて台詞はありぬ霞草芽吹風外してもらふ補助車輪



夏季吟旅特別吟

鈴鹿呂仁

岡山（後楽園・倉敷・閑谷・備前焼）

老鶯の潜み音淡し烏城門
夏蝶の園のお忍び揚羽紋
さ揺れとて青葉若葉の詳らか
浅廂薄暑の堀の蔵町家
天領の風の阿る堀薄暑





漁場へと航跡白し青葉潮
一島の霞めば瀬戸の縁起めく
緑さす塩飽諸島の円らなる
国盗りの備讃の史や夏の潮
蟬曰く閑谷知らぬは吟を得ず
万緑の閑谷深し楷の首座
閑谷の一灯烈し火蛾の燭
窯跡を鎮め忌部の風青し
緋襷や夜の新樹のくぐもれり





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

臃よりおぼろへ千夜一夜かな

一列は捧げ銃かも葱坊主

琵琶湖出し水の歓喜やしじみ舟

まつしるな雲追ひかけて入学す

ワルツを聴きませう桜の降る夜は

人力車さくら起しの風のせて

ポン菓子のポンと桜の芽を急かす

菜の花のサラダが付いてBランチ

入学す甘え一枚脱ぎ捨てて

八寸に盛り込む遊行花洛の忌

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

岬めぐり海は卯波の反射光

国引きの綱引き寄せる青葉潮

透きとほるまで新緑の深呼吸

ジバルデイの弦楽合奏若葉風

高瀬川一之船入さみだるる

祈りとは遥けきを飛ぶ紋白蝶

声にいるありてさざめく花の宴

異教徒のベールふはりと花の風

そつのなき風の誘ひや花吹雪

人さらひ通つたやうな春の暮

城陽 鷺山 珀眉

京都 片山 熙子

悼む日の思惟のかたちに蝸牛
人垣にゐて一人なり星まつり

福 山 亀井 福恵

そのかみの御幸の白馬夏がすみ
金泥の瓔珞昏し堂薄暑
蓬萊山よりの水音夏椿



日永かな遊びを知らぬ電波時計

京 都 加舎 廣子

望むのはぶれぬ生き方葱坊主
恋のこと言ひたくなくて櫻餅

比良八荒塾の幡のみな裏字
字余りに生きてたんぼぼ踏んでゐる

鎌 倉 平佐 和子

路の臺翻訳すればお袋さん
四姉妹形見分けしてうぐひす餅
あの瞬の家族に遭ひに海市まで

花狼煙関の声あげ大地より

守 口 藤浴 博子

野焼跡夕星一つ燦とあり

魚板古り皆仏の子飛花落花

風光るここが在所や背の子ねる

卒業や友は下宿を掃き清む

膝小僧並んでゐるよ一年生

山吹や落人抜けた谷伝ひ

遠き京語ること増え花大根

私の眼ピツタリ正解雪つもる

雪の原眺めは白く空の青

くもり空明日にはきつとつもる雪

枯木のみ林立している窓の外

冴返る水道工事土の中

梅ヶ香や社の森に漂へり

梅咲くや戌辰の役の墓石有り

早春やたなびく雲にうれひなし

旅立つ二人に祖母は心寄せ

野風呂忌や数冊の句集道ひらく

桜もち友より届く句も宿題

入学の孫の机に座して祝ふ

逝きし朋病む友懐ふ虎落笛

新社員細長の靴背は高し

原宿の陸橋遥かに霞む富士

春の京独り墓参や父母の声

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

酒 田 藤波 松山

渋 川 東 秋茄子

さいたま 神田 惣介